

適応指導教室「あやばに学級」実践報告

～学校適応をめざす支援の工夫～

石垣市立適応指導教室
指導教諭 浅井みさ乃

I 適応指導教室「あやばに学級」の経営

1 学級経営目標

- (1) 心理的要因によって不登校や登校しぶりの児童生徒に対して、心身共に安心できる居場所を提供する。
- (2) さまざまな活動を通して、自立心と社会性を高め、集団への適応力を育てる。

2 めざす子ども像

- (1) 自分の気持ちを表現できる子・・・自分で考え、気持ちを伝えよう
- (2) 自分で決めて行動できる子・・・目標を決めて挑戦しよう
- (3) 思いやりのある子・・・思いやりと感謝の気持ちをもとう
- (4) 明るく元気な子・・・生活リズムを整え明るく元気に活動しよう

3 経営方針

- (1) 個々の児童生徒に対して教育相談、学習指導、集団生活への適応指導等、柔軟に対応し、めざす子ども像の具現化に努める。
- (2) 多様な体験活動や遊び等を通して生活体験を広げ、人と関わる力の育成に努める。
- (3) 児童生徒個々の指導・援助の在り方について、原籍校関係職員や「あやばに学級」担任・指導員との共通理解を図り、一貫性のある指導・援助を行う。
- (4) 日常生活全般における児童生徒の実態や指導・援助の記録をとり、次の支援の手がかりにする。
- (5) 学校・家庭・各関係機関等と連携を密にし、協力しながら児童生徒の学校復帰と将来の社会的自立に向けた支援体制を整え個々に応じた指導・援助を行う。
- (6) 児童生徒の指導・援助にあたっては、次のような記録簿を作成し、報告する。
 - ◇ 原籍校への出席状況報告書（毎月1回）
 - ◇ 支援日誌
- (7) 児童生徒理解の促進、変容に応じた指導・援助に活用する。
 - ◇ 生活日誌
 - ◇ 面談シート
 - ◇ プロフィール
 - ◇ 個別の教育支援計画
 - ◇ 経過観察フォーム
 - ◇ アンケート
- (8) 原籍校の一員であるという所属感をもたせるため、原籍校の学級担任や教育相談担当等による支援をお願いする。
- (9) 個々の児童生徒の実態把握を行い、適切な支援方法を検討する機会をもつ。
 - ◇ 学校における支援会議やケース会議への参加
 - ◇ 専門家、福祉等関係機関との情報交換・連携
 - ◇ 沖適連や他適応指導教室との情報交換・連携

4 家庭・原籍校・適応指導教室の役割と連携

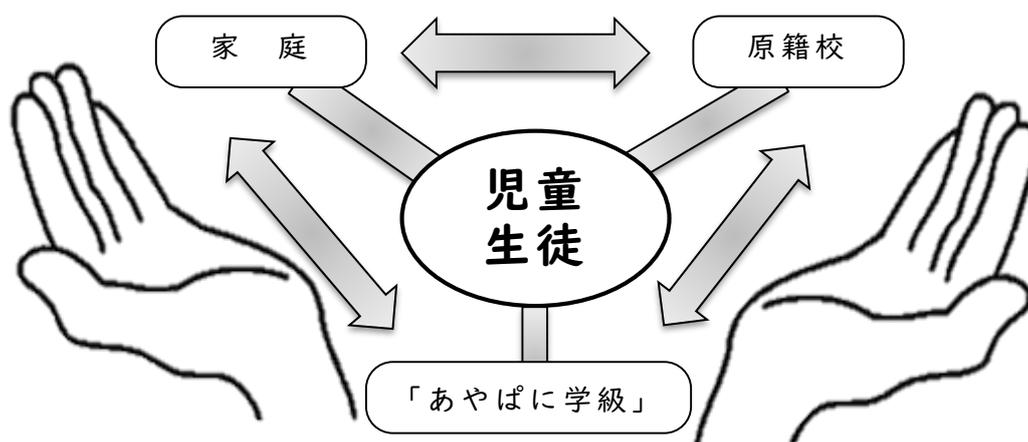


図1 連携のイメージ

家庭

- ・ 基本的生活習慣を確立し、生活リズムを整えさせる。
- ・ 在籍学級及び「あやばに学級」との連携・協力
- ・ 定期的な来級相談（お子さんの様子、家庭での気になること等情報共有）
- ・ 三者面談・保護者会等への参加
- ・ 登校支援
- ・ 各行事への参加

保護者との連携
① 保護者との連携・三者面談
② 学校からのおたより等の配布
③ 徴収金(学年費・教材費・給食費)の調整
④ 保健関係の諸調査の連絡・調整

原籍校

- ・ 担当者の明確化と「あやばに学級」と連携協力する窓口の設定
- ・ 原籍校学級担任による課題や家庭学習の取組
- ・ 「あやばに学級」への訪問
- ・ 評価、学校行事等に関する連絡・調整
- ・ チャレンジ登校する際の受け入れ体制の整備
- ・ 支援終了後の校内での居場所の確保・配慮

個別の支援計画

※体験通級後

あやばに学級

- ・ 保護者及び原籍校の関係職員との連携
- ・ 保護者及び本人との面談（実態把握）
- ・ 原籍校学級担任等との面談（実態把握）
- ・ 不登校に至った児童生徒の経緯把握及びその理解
- ・ 入級児童生徒への段階的な指導・援助
- ・ 原籍校主催の会議等への参加
- ・ 毎月の出席状況報告及び支援日誌作成
- ・ 教育相談、来級相談への対応

適応指導教室との連携
① 学習教材及び課題プリントの提供
② 校内支援会議への参加呼びかけ
③ 定期テストや提出物等、評価に関する連絡・調整
④ 進路指導及び高校入試に関する資料の提供・諸手続き

5 あやばに学級の主な活動計画（例）

活動	具体的活動内容（例）
学習活動	学校の課題・テスト等 自主学習 出前授業 ICT活用の学習
生活体験活動	朝・昼の清掃活動 調理実習（メニュー決め・役割分担等）
栽培飼育体験活動	菜園活動 観葉植物への水やり 青少年の家主催の事業
制作体験活動	掲示物制作 手工芸体験 美術や家庭科の課題制作
自然体験活動	カヌー体験 登山教室 遠足
社会体験活動	職場体験 警察署見学 進路学習 ことばの日
歴史文化体験活動	平和学習 史跡巡り
スポーツ体験活動	卓球 ソフトバレーボール ソフトテニス フリスビー
宿泊体験活動	【宿泊場所例】 青少年の家 【活動例】 野外炊飯 自然散策

II 児童生徒の実態

1 学級の実態

(1) 学年別通級児童生徒

2月末現在

		小1	小2	小3	小4	小5	小6	中1	中2	中3	合計
男子	本								1		1
	体験								1	1	2
女子	本					1	1	2	2	2	8
	体験	1			1	1	1	4	2	2	12
合計	本					1	1	2	3	2	9
	体験	1			1	1	1	4	3	3	14

(2) 教育相談と見学の状況

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	合計
教育相談		1				1		1				3
見学人数		3	2	2	0	3	3	2	1	0	1	17

※見学17名中 体験通級14名，本通級9名

(3) 通級児童生徒の様子

児童生徒の理解を図るため、「あやばに学級」見学時に本人・保護者・学校関係者を交えて面談を行う。児童生徒や保護者との面談・会話・相談シートなどから、不登校に至る経緯を把握する。児童生徒を多面的に捉えるために行動や会話、つぶやき、生活日誌の記録やアンケートなどをもとにしなが児童生徒理解につなげていく。

① 通級児童生徒アンケート（7名）

○「学校を休み始めた」「教室に入れなくなった」きっかけは何ですか。

・担任の先生や教科の先生との関係	1名
・学級になじめなかった	3名
・その他 緊張してお腹が痛くなる 宿題を忘れた不安から 何が原因か分からない	3名

※友人関係より教室全体の雰囲気が気になり不安が大きくなっていった傾向が見られる。

○「学校に行けない」「教室に入れない」状況が長引くのはどうしてですか。

・勉強についていけない	3名
・ずる休みと言われたりするのが嫌	1名
・学校に行く気力がない	1名
・入るタイミングをのがした	1名
・一度学校を休む楽しさを知ってしまった	1名

※勉強が遅れてしまった不安から休みが続いてしまう傾向が中学生に多く見られた。

○「支援室で過ごす良さ」は何ですか、「多く利用できない」のはなぜですか。

支援室の良さ	多く利用できない理由
・人が少ない ・学校の敷地に入れる ・同級生の顔が見られる ・落ち着いて勉強に取り組める	・段々人が増えてくる ・さわがしい ・みんなに見られる ・静かすぎて閉鎖的で合わない

※登校できる安心感が持てるものの、不安になる児童生徒が多い傾向が見られる。

○自分の将来について夢や希望がありますか。

ある 6名	ない 1名
<ul style="list-style-type: none"> ・イラストレーター ・スーパーのレジ打ち ・医者 ・PC関係の仕事 ・音楽・動画の編集 ・商売人 ・日本一周 ・栄養士 ・パン屋 ・アイドル ・料理人 	想像できない

※ほとんどの児童生徒が夢を持ち、自分に適している職業を考えている。

○あやばに学級に通う事で、つけたい力は何ですか。(複数回答)

・コミュニケーション(あいさつ, 人と話すなど)	5名
・学力向上	4名
・体力向上	1名
・自分の気持ちや考えを人に伝える, 発表する力	1名
・その他 → 友達を増やす	1名

※ほとんどの児童生徒が、自分の苦手としていることを本学級に通うことで克服したいと考えている。

○あやばに学級に通うようになって何か変化はありますか。

・生活リズムが崩れなくなった	2名
・朝ごはんを食べられるようになった	1名
・自分で登級できるようになった	1名
・前より人と話せるようになった	2名
・勉強の焦りが減った	1名

※不安を持っていた部分が少し解消できて前向きな気持ちが生まれてきている傾向が見られる。

○学校に復帰するときに一番不安に感じることは何ですか。

・朝, 遅刻しないか	1名
・学級の雰囲気になじめるか	2名
・学級に友達が少ない	2名
・腹痛や胃痛が起きたらどうしよう	1名
・担任が明るくて優しいか	1名

※コミュニケーション力に不安を感じている子が多いので、雰囲気を気にする傾向が見られる。

○4月には、どういう自分になっていきたいですか。

・学校や進学先に登校する	3名
・今年と同じようにあやばに学級に通いながら, 登校を目指す	2名
・何でもやってみる自分になる	1名
・想像できない	1名

※ほとんどの児童生徒が、4月からは学校に行けるようになりたいと前向きに考えているが、次年度も本学級に通いたいと思っている児童生徒もいる。

Ⅲ 支援の実際

1 安心できる環境づくり

(1) 日課表

日課表はあくまでも目安として活用し、月行事や週予定に応じて柔軟に対応した。

【原則として】

- 火曜日 スポーツ体験活動
- 水曜日 調理実習
- 木曜日 栽培飼育活動

登級人数や児童生徒の個々の状況に応じて対応していくものとする。日課表に合わせてチャイムを流し、時間のけじめや気持ちの切り替えができるようにした。

(2) 居場所づくり

個人にロッカーと靴箱を割り当て、安心して荷物を置けるようにした。また、自己紹介シートやワークシートの掲示スペースを1人1人に1列設けることで視覚的に所属感を感じられるように工夫した。また、ワークシートにはコメントを記入して全体で共有できるようにした(写真1)。さらに、日々の活動の様子の写真を集めたアルバムを作成し、児童生徒が手に取れる場所に置くことでいつでも自分達の活動の様子を写真で振り返らせるようにした。机の配置を工夫し学習スペースを確保した上で、昼間のスペースには本や楽器、パズル、ボードゲーム等を置き、リラックスしながら過ごせる環境づくりを行った(写真2)。



写真1 一人一列の掲示スペース



写真2 昼間でリラックス中

(3) 音楽の効果

時間帯を「みどりタイム」「授業中」「給食・清掃・昼休み」に分け、3パターンのプレイリストを作成し音楽を流すことで、一日の時間の流れを感じやすいように工夫した。「給食・清掃・昼休み」時には、流行の曲や児童生徒が好きな曲、原籍校の行事等(合唱コンクール・運動会)で使用されていた曲を流した。音楽がきっかけで話が弾むこともあり、コミュニケーションツールの一つとしても活用できた。

時間帯	プレイリストパターン
朝のみどりタイム	さわやかな曲 (J-pop 等)
授業中	ジブリジャズ 沖縄ソング等
給食・清掃・昼休み	流行の曲 児童生徒が好きな曲 原籍校の学校行事等で使用された曲等

時間(分)	曜	月	火	水	木	金
30	8:30~9:00	登級(日誌記入)				
10	9:00~9:10	朝の活動				
5		休憩・準備				
45	9:15~10:00	学習活動①				
10		休憩・準備				
45	10:10~10:55	学習活動②				
10		休憩・準備				
45	11:05~11:50	学習③	スポーツ体験活動		栽培活動	学習③
10		休憩・準備		調理実習 昼食	休憩・準備	
30	12:00~12:30	昼食				
15	12:30~12:45	清掃				
30	12:45~13:15	準備・昼休み				
45	13:15~14:00	学習活動④				
5		休憩・準備				
45	14:05~14:50	学習活動⑤				
10	14:50~15:00	退級(日誌記入)				

表1 日課表の例

(4) 掲示物の工夫

学級テーマや個々の学期のめあて等の掲示をして、児童生徒がいつでも目標を持って前向きに過ごせることをねらいとした。学期のめあてには、学習面・生活面に加え、学校を意識させるために「チャレンジ登校」の項目を設けた。自分のペースに合わせた具体的な目標を設定し、学校復帰を目指すきっかけになった。また、

「健康・運動」の項目も加えたことで、自分の生活リズムを見直し、毎日通級めの習慣作りのきっかけになった(写真3)。

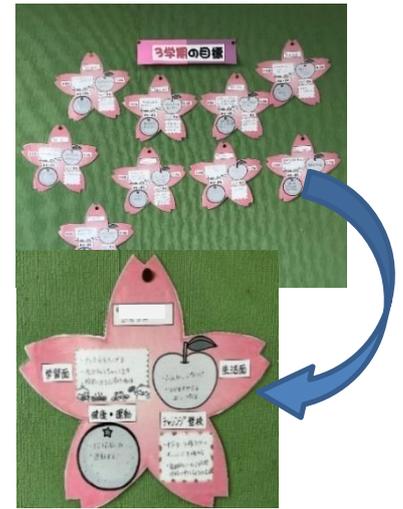


写真3 学期のめあて

昨年度在籍していた児童生徒や今年度在籍の児童生徒の大会やコンクール等での活躍記事などを掲示することで、互いに賞賛の声かけやコミュニケーションを図るきっかけになった(写真4)。



写真4 あやばにっ子の活躍記事

原籍校の学校行事の様子や進路活動等が把握できるように務め、スムーズにチャレンジ登校の支援が行えるように心がけた(写真5)。チャレンジ登校を頑張っている児童生徒も把握できるようにし、児童生徒がお互いに高め合えるように工夫した。一日を前向きに過ごせるようにばいーぐるから今日の一言として励ましの言葉かけを毎日行った(写真6)。

見通しをもって過ごせるように、本学級と各学校の月行事の掲示を行った。また、本学級の行事の写真を掲示し、写真を通して活動を振り返り、喜びや達成感が感じられるように工夫した。保護者や来級者にも児童生徒の頑張る姿を見てもらう機会とした(写真7)。



写真5 学校のおたより



写真6 登・退級時刻記入



写真7 教室前の掲示

2 信頼関係を築く児童生徒理解

(1) 生活日誌

児童生徒が、毎日登級時と退級時に記入する。起床時刻・就寝時刻・朝食の有無等を記入し、その日の体調や家庭での様子を知ると共に、基本的な生活の習慣化を促した。また、目標を設定し退級時に一日の学習や活動を振り返ることで、自己評価ができるようにした。通級し始めた時は感想が1行や2行だった生徒も、後には文字数が増え、自分の素直な気持ちや前向きな言葉を書くなど、変容が見られた。さらに、登級時と退級時の気分の割合を色で表すことで、児童生徒の心の動きを知ることができ、支援の手がかりとして活用した。

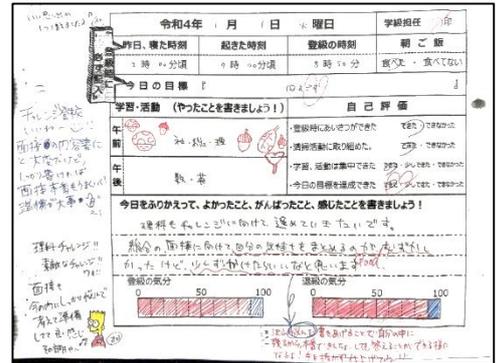


図2 生活日誌

退級時には、登級時と比べてプラスの気分が増える児童生徒が多く、本学級で過ごすことやチャレンジ登校を行う中で、達成感を味わい自己肯定感を育むことができたと考える。全職員が毎日コメントを入れ、励ましの言葉かけを行うことで、次のステップへ繋がるように心がけた(図2)。

(2) 支援日誌

日々の児童生徒の様子や活動内容を本学級職員で記録し、支援の手だてとした。また、欠席した日も保護者から欠席理由や家庭での様子を連絡してもらおう等、保護者との連携を密にし、児童生徒の実態把握に務めた。さらに連絡ファイルを活用して、支援日誌を週一回原籍校の担任へ、月に1回出席状況報告書と一緒に学校長へ提供した。学校職員と共通理解を図ると共に、本学級で取り組んだ学習や活動を、スムーズに学校の評価に繋げてもらう為に、教科に加えて単元名も入れる等、具体的な内容の記録を心がけた(図3)。

令和4年度 支援日誌						
在籍校		石垣市立 △△△ 学校 □年 □組			氏名 ○○ ○○	
氏名						
・児童生徒の様子 ※支援 □学校・その他						
月日	曜日	通級の様子			活動内容	
11/21	月	登	8:45	送迎	午前 国語(観察・分析して論じよう) 数学(関数) 社会(テスト勉強)	午後 英語(英語ラボ) 数学(関数)
		退	15:15			
<ul style="list-style-type: none"> ・国語は、観察・分析して論じようの単元を読み込み、重要な点をノートにまとめて自習を行った。 ・社会は、テスト勉強を行った。これまで学習したプリントを繰り返し解いていた。9割正解することができた。 ・英語は、テスト勉強を英語ラボを使い学習した。答えを見て文法を理解してから、ノートに記述していた。 ・数学は、実際の場面での関数の利用の問題に取り組んだ。また、週末に自主学習で基本の問題に取り組んできており、8割程度正解することができていた。 ・昼休みは、カードゲームUNOを行いリラックスして過ごす様子が見られた。 						
11/22	火	登	8:45	送迎	午前 理科(電池とイオン) 社会(テスト勉強) 数学(関数)	午後 英語(英語ラボ) 数学(関数)
		退	15:10			
<ul style="list-style-type: none"> ・理科は、電池とイオンの範囲を単元テストを活用して自習を行うことができた。 ・社会は、参考書を見ながら学習をすることができた。 ・英語は、英語ラボの長文の問題に挑戦した。内容を把握することができ、自分の意見は調べながら英文を書くことができた。 ・数学は、教科書の関数の利用の問題に取り組んだ。放物線と直線が交わる問題に、苦しんでいたが粘り強く取り組むことができた。テストに向けて、明日の公休日は「○○まで進めたい。」等、勉強の計画を立てる様子が見られた。 						

図3 支援日誌

(3) 家庭・学校との連携指導

家庭・学校との連携は、安定した環境づくりのために不登校児童生徒にとって欠かせないものである。家庭とは定期的な面談や送迎時の談話の他、電話連絡やショートメール等を利用してこまめに連絡が取りあえるようにした。また、原籍校とは、昨年度に引き続き「連絡ファイル」を作成した(図4)。さらに、新たに Teams でチャット機能を利用してデータ文書のやりとりをすることで、迅速に文書を収受することができた。

- ① 家庭に対して
 - ・学期ごとの面談資料作成
 - ・あやばに通信（学級日より）
 - ・登級時、退級時の情報交換等
- ② 学校に対して
 - ・支援日誌の提供
 - ・「連絡ファイル」での課題やお便りの受け渡し
 - ・ワークシートへのコメント依頼等
 - ・チャット機能での週報や週案の提出



図4 連絡ファイル

3 学習意欲を高める具体的な手立て

(1) 時間割と教科担当

児童生徒が学習に慣れてくると、登級時の生活日誌記入の際に、自分で1日の時間割を決め、意欲的に取り組めるようにした。また、色々な職員で関わられるように、職員で学年と教科を決めて学習支援を行った。

	月	火	水	木	金
印	16日	17日	18日	19日	20日
朝の活動	清掃	清掃	清掃	清掃	清掃
学習①	歴	国	英	理	歴
学習②	理	歴	総	国	自
学習③	英	千	総	理	千
昼食					
フリータイム					
学習④		英	国	英	千
学習⑤		理	教	千	千
満足度	100%	100%	100%	100%	100%

図5 児童生徒の予定表

		国語	算数/数学	理科	社会	外国/英語	図工/美術	音楽	体育	家庭科
小5	みさの	みさの	まどか	ゆい	みさの	まわこ	ゆい	まどか	ゆい	
小6	みさの	みさの	まどか	ゆい	みさの	まわこ	ゆい	まどか	ゆい	
中1	みさの	まどか	まどか	ゆい	ゆい	まどか	ゆい	まどか	ゆい	
中2	みさの	まどか	まどか	ゆい	ゆい	まどか	ゆい	まどか	ゆい	
中3	みさの	まどか	まどか	ゆい	ゆい	まどか	ゆい	まどか	ゆい	

やつてみて
 微妙だったら
 変更可
 友蔵

本朝の授業は、
 人は(和)でいいよ
 謝辞

オンライン授業
 幸せとは、
 学ぶことが
 何より重要

よし! 達成!

図6 職員の教科担当表

(2) 学習形態

学習形態は、個別学習を中心に職員が支援し、学習の進度に合わせて学校からの課題への取り組みを行なった。また、時には同学年や異学年、全員など学習形態を変えて内容に応じて級友同士も関わり合えるようにした。

① 個別学習

主に、学校の課題への取り組みを行った。教科書を使ってプリント課題やワークなどを中心に学習し、学校へ提出できるようにした。また単元テストや定期テストに向けての対策、技能教科課題への取り組みを行い評価につながるよう努めた(写真8)。



写真8 個別学習

② 同学年・異学年との学習

基本的には、個別学習を進めていくが、同学年で学習進度がほぼ同じ場合は、一緒に学習を行い共に学ぶ場を設定した(写真9)。また、異学年との学習では、コミュニケーションを図ることを目的に様々な体験活動に取り組ませた。同学年の学習の成果としては、小学校の単元テストでは結果が返ってくると「せーのっ！」で見せ合う場面がみられたり、中学生では定期テストが近づくと互いの学校の試験範囲の話をする姿がみられた。異学年との学習では、自然と上級生が下級生に教える姿が見られた。



写真9 同学年で学習

(3) 級外講師との学習

毎日の学習がマンネリ化しないように、専門的な学習が受けられるという点から級外講師を招いての学習も取り入れることができた。ALTは石垣市教育委員会より派遣され、今年度10回交流する機会が持てた。ALTとは、レクレーションを楽しみながらネイティブな英会話を直に学ぶことができた(写真10)。



写真10 ALTと異学年で英語

また、原籍校教諭来級の際には、専門教科の進捗状況を確認したり、テスト対策を行ったりした。さらに、他学年の児童生徒の指導にもあたって頂いた。指導してもらった児童生徒は「顕微鏡楽しかった。特に、たまねぎの細胞がThe細胞！って感じでワクワクした」「専門的なことを教えてもらって分かりやすかったし、もっとできるようになりたいと思った」と意欲が向上した様子の感想を書いていた(写真11)。



写真11 原籍校教諭との授業

(4) ICT機器の活用

今年度は、各学校で全児童生徒にタブレットが配布されたこともあり、あやばに学級にもWi-Fi環境を整備してもらった。そのため、日々の学習の中でタブレットを積極的に活用させ、Teamsで学級とつないで授業にオンラインで参加したり、ロイロノートで教科から出た課題を提出したりして学校や学級と児童生徒が繋がるようにした(写真12)。



写真12 オンライン授業に参加

4 自信が育つ体験活動

(1) 児童生徒主体の体験活動

体験活動の中でも力を入れて取り組んだのが、児童生徒が主体となって計画・実行する体験活動である。自分たちで企画し、職員に計画書を提出して実際にやってみることで、達成感を味わい自己肯定感が高まるよう工夫した。

① 調理実習

月に1～2回程度行った。毎回児童生徒の様子をみて、ランダムにコック長を決めて取り組んだ。コック長は、料理のメニューと必要な材料を調べて買い出しを行い、調理は全員で担当を割り振ってお互い協力しながら作ることができた(写真13)。



写真13 調理実習の様子

② パーティーの企画

ハロウィンやクリスマスの時期には、児童生徒から何かやりたいと声があがり、自分たちで話し合いを持ち、日時や内容を考えて職員に計画書を提出した。職員はその計画書をもとに、実際に実施が可能な内容か選定をして、できるだけ児童生徒が希望しているものを成功させられるよう支援することを心がけた。また、ハロウィンで仮装して集落をパレードした際には、地域の企業の協力も得ることができた(写真14)。



写真14 ハロウィンの仮装

③ 遠足

毎年行っている遠足だが、今年度は一人ずつパワーポイントやワードで計画書を作成し、Teamsの会議機能を活用して、画面で作成したものを共有しながら行きたいところのプレゼンを行った。

最終決定まで数回検討し、場所や係の分担、仕事内容を話し合い、互いに折り合いをつけて柔軟に対応することができた。遠足当日は、レク係を中心にバスの移動時間も級友とのコミュニケーションを図る大切な場としてゲームで大いに盛り上がることもできた(写真15)。



写真15
アニマルテラスに遠足

(2) 職員主体の体験活動

本学級では、少ない職員との関わりしか持てない児童生徒に視野を広げてもらうため、外部から講師を招いて様々な人とふれあい、多様な生き方を学ぶ機会を設けた。

① 教育講話

今年度は、10月に「もうひとつのオキナワ」と題して島尻高樹さん、伊良皆高虎さんを講師に招いて、実際にポリビアに行き沖縄から移民した方々とふれあい感じたことなどを話して頂いた。講話に参加した児童生徒から「外国にオキナワという地があることに驚いた」「日本と違う国で言葉が話せなくても気持ちは伝わるということを聞いて外国に行ってみたくなった」と感想があった(写真16)。



写真16
「もうひとつのオキナワ」

12月には「不登校だった私の体験談」と題してあやばに学級1期生の仲村あゆみさんを講師に招いて不登校を体験したその後の生き方について話して頂いた。児童生徒から「今は不安だらけだけど講話を聞いて、未来は幸せになっていると思えば頑張れそうな気がする」「他の子は毎日学校に行って運動も勉強も進んでいると思っていたので、あゆみさんの気持ちがよく分かった。私もネガティブに考えるくせがあるので、これからはポジティブに考えられるようにしたい」と前向きにとらえるようになった感想が多くあった(写真17)。



写真17
「不登校だった私の体験談」

講話を通して、児童生徒にとって自己を見つめ多様な生き方について考え、自分の将来を前向きにとらえる機会となった。

② ものづくり教室

9月に、金城悦さんを講師に招き、パインキーホルダー作りを行った。参加した児童生徒は夢中になり講師の説明を真剣に聞きながら作成に取り組むことができた。敬老の日が近かった為、作成したものを祖父母にプレゼントする機会とした。参加した児童生徒は「最初は難しかったけど結構できるようになって楽しかった。家でも作ってみたい」と感想に書いていた(写真18)。



写真18 パインキーホルダー

(3) 他機関との体験活動

通級児童生徒の多くは、コミュニケーション能力に不安を持っている。そのため、沖縄県立石垣青少年の家、八重山警察署生活安全課少年係の方、教育研究所研究員、青少年センターの同年代の児童生徒など、広く多くの人とかかわる機会を持つことで、強い人見知りや初対面の人に対しての苦手意識を少しでも取り除けるよう心がけた。



写真19 青少年の家主催カヌー

① 沖縄県立青少年の家とのかかわり

芋(じゃがいも)植えやその収穫祭、カヌー体験といった栽培飼育活動、自然体験活動など多くの級外活動において多大なご理解と協力を得た。また、青少年の家まつりのボランティアに参加し、お手伝いをする中で頼りにされたり感謝されたりしたことで喜んで活動することができた(写真19)。



写真20 スポーツ交流

② 八重山警察署生活安全課少年係とのかかわり

今年度は、昨年度に引き続き、交流の機会が少なかったが、青少年センターと交流をした際に、一緒に卓球をしたり、警察署見学などで交流を持つことができた。その際には、普段は関わる機会の少ない警察署の方が児童生徒に積極的に声をかけて下さり貴重な交流となった(写真20)。



写真21 屋良部岳登山

③ 青少年センター通所児童生徒とのかかわり

あやばに主催の行事に声かけしたり青少年センター主催の行事と一緒に参加し活動することができた。「スポーツ交流」2回「平和学習」「警察署見学」「屋良部岳登山」等の行事を通して、交流を深めることができた。スポーツ交流に参加した児童生徒は「最初は緊張したけどみんなですべて楽しめて良かった」「貴重な体験ができたので、またやりたい」と感想に書いていた(写真20)。屋良部岳登山の感想には「楽しかったけど、きつかった。でもみんなでおしゃべりしながら楽しく登って良かった」「前日から楽しみにしていた。車酔いできつかったけど山の頂上に着いた時の風や景色がきれいでとても良い経験になって楽しかった」と書いていた(写真21)。同世代の児童生徒同士ということもあって、気兼ねなく関わり合うことができた。

④ 教育研究所研究員とのかかわり

10月から教育研究所に入所した2名の先生方を本学級へお招きして、標本づくりを行ったり、教育講話を一緒に聞くなどして交流を深めた。児童生徒が研究所を訪れた際には、温かく迎え入れ、本学級の行事には、プレゼントを用意するなど、積極的に関わっていただいたこともあって、研究所へ行くのを楽しみにしている児童生徒もいた(写真22)。



写真22 教育研究所へ訪問

5 学校復帰を目指すチャレンジ登校

児童生徒の本学級への登級と心理面が安定してくると、本人と相談しながら段階的にチャレンジ登校を進めていく。当日朝の気分を確認してチャレンジ登校を実施している。チャレンジ登校に向けては、平成28年度の研究員與那國充子教諭が作成した「学校生活に適應するまでの支援の構想図」をもとに、個に応じた登校の仕方を検討し、進めてきた。

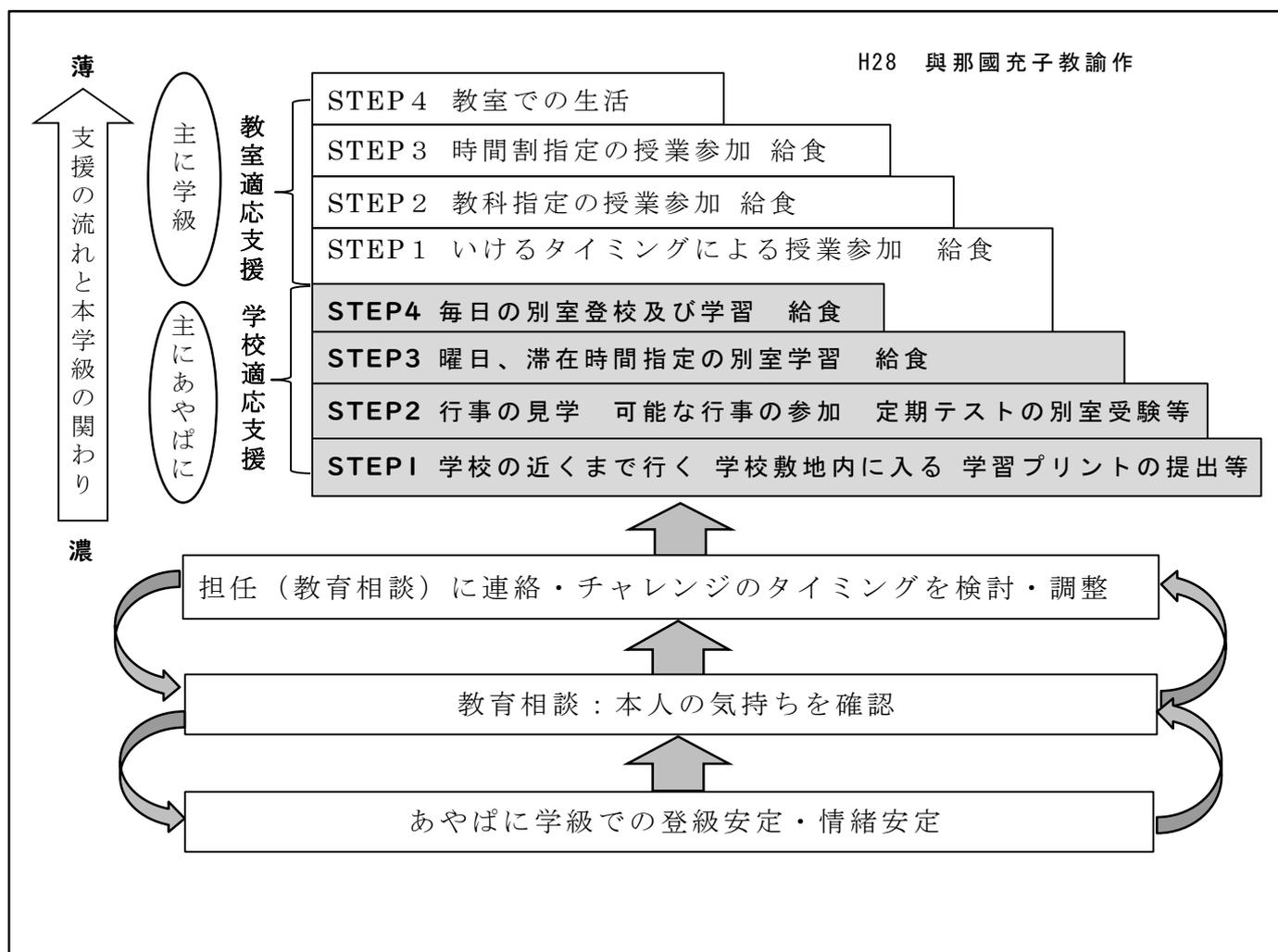


図7 学校生活に適應するまでの支援の構想図

(1) 今年度のチャレンジ登校状況(令和5年2月末の在籍9名中のべ人数)

主にあやばに：学校適応支援		人数
STEP 1 学校の近くまで行く 学校敷地内に入る 学習プリントの提出	事例) 課題プリントやノートの提出 教材費の提出 単元プリントを取りに行く	7名
STEP 2 行事の見学 可能な行事の参加 定期テストの別室受験等		
事例) 体育祭の見学 合唱コンクールへの参加 運動会への参加(写真23, 24) ダンスフェスティバル見学 始業式・終業式への参加 定期試験受験		7名
STEP 3 曜日、滞在時間指定の別室学習 給食	事例) 1時間だけ支援室で学習 支援室で給食を食べる 金曜日の5校時だけ支援室で学習する	4名
STEP 4 毎日の別室登校及び学習 給食		
事例) 登級できた日は毎日支援室に給食を食べに行く		1名

※初めのSTEP1・2は、安定して登級できるようになった児童生徒は全員チャレンジできるようになった。

主に学級：教室適応支援		人数
STEP 1 いけるタイミングによる授業参加 給食	事例) 登級した際に今日の時間割で入れそうな授業へ参加 (写真25)	3名
STEP 2 教科指定の授業参加 給食		
事例) 国語・理科・家庭科だけは毎時間受けに行く		4名
STEP 3 時間割指定の授業参加 給食	事例) 水曜日と金曜日は一日(半日)行く	2名
STEP 4 教室での生活		
事例) 行ける限り毎日登校する		1名

※個に応じてできるステップから支援しているため、なかには次の段階を飛ばして上のステップにチャレンジしている児童生徒もいる。また、具体的な目標(受験に合格したい・4月には学校に戻りたい等)を持っている児童生徒は次への進度が早い傾向がみられた。

① 児童生徒の声

Sさん	緊張したけど始業式の様子が見られてうれしかった。みんながいるところに行くことはできなかったけど、次はみんなのところにチャレンジしたい。
Nさん	クラスの人たちのやり取りが面白かった。教室に入るまではすごくドキドキしたけど、行けて良かった。
Uさん	ちょっと緊張したけどいろんな人と話せた。テストをどこで受けるか考えることができた。
Aさん	久しぶりの給食まで食べるチャレンジで緊張したけど、4校時から6校時まで教室にいらることができて良かった。給食を食べる回数も増やしていけたらと思う。



写真23 合唱コンクール



写真24 運動会



写真25 総合の事前学習

(2) チャレンジ登校への手立て

① チャレンジ登校を一緒に相談・計画

チャレンジ登校を始めるのは、とても勇気がいるため、きっかけが必要となる。そのため、登級が安定してきた児童生徒に対して、「チャレンジ登校計画表」を作成し、1週間ごとに振り返りながらステップアップしたり、ステップバックしたりして調整を行った(図8)。

② チャレンジ登校の振り返りと担任とのつながり

チャレンジ登校ができ、教室に入ることができても担任の先生と通級児童生徒はゆっくりコミュニケーションを取ることができない場合が多い。そこで、適応指導教室に戻った際にチャレンジ登校の振り返りをし、児童生徒の感想を原籍校担任へ伝える取り組みをした。担任の先生には丁寧に対応していただき、担任のコメントを読む児童生徒の表情がほころぶ様子があった。また、質問したいことを書く欄も設け、授業や行事の事などを聞けるようにした(図9)。

③ 学校の職員や担任による児童生徒への声かけ

学校の「生徒支援」担当の職員や担任の先生方が、本学級へ来級して児童生徒へ声をかけたり、課題やお便りを届けて下さったりした。また、チャレンジ登校の際に、学校と本学級間を送迎したり、協力的に児童生徒と関わっていただいた事で、安心感を持って、学校にチャレンジ登校する機会が増えた(写真26)。

6 学校と児童生徒がつながる ICT 機器の活用

今年度は意識的に児童生徒にタブレットで学習に取り組ませたり、学校とのやり取りに活用するよう心がけた。なかには、オンライン参加から挑戦し、徐々に教室に入るといった段階を踏むことでチャレンジ登校ができるようになった児童生徒もいた。

また、本学級職員が直接原籍校の担任と連絡が取りやすくなったことで各学校の行事のスケジュールや毎週の週報など、急な学校の予定変更をメールカーを待たずにデータでやり取りできるようになった。週報や予定変更のやり取りなどはチャレンジ登校を行う際に児童生徒が見通しを持って安心できるため、役立てることができた。

(1) 児童生徒の声

① Teams で担任の先生や教科担任と連絡を取り合うことに関してどう思いますか。

良かった	4名	どちらでもない	3名
良くなかった	0名	使わなかった	0名

※やり取りに関して良い方に捉えている児童生徒が多かった。

② ①で選んだ回答に対して理由を教えてください。

良かった	<ul style="list-style-type: none"> 聞きたい事をいつでも聞ける・先生がいろいろ教えてくれる 数学ノートの解答を聞いたその日に答えてくれた 今どの単元をやっているか聞けるから ノートが進められる
どちらでもない	<ul style="list-style-type: none"> メッセージが遅れて通知されることがあった 連絡をあまり取らなかった メッセージを送っても返ってくるのが少なかった(教科)

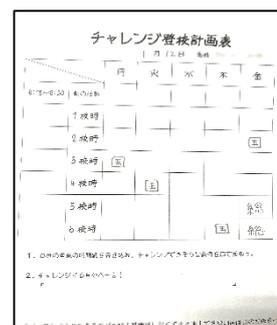


図8 チャレンジ登校計画表

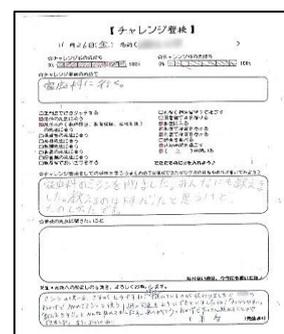


図9 チャレンジ登校シート



写真26 学校職員の声かけ

- ③ あやばに学級から学校の先生とやり取りをしてみて良かった点と課題点を教えてください。

良かった点	<ul style="list-style-type: none"> ・ロイロノートとかできれいにまとめられる ・質問がしやすく便利 ・提出物の確認ができた
課題点	<ul style="list-style-type: none"> ・タイピングが難しい ・授業中か空き時間かわからない時にメッセージを送りにくい ・タブレットを開いてないとメッセージに気づけない

※質問がしやすい反面、意識して開かないとメッセージが見られないことに不便を感じている児童生徒が多くいた。

- ④ 各教科にオンライン授業があれば参加したいですか。

参加したい	2名	時々なら参加したい	4名	参加したくない	1名
-------	----	-----------	----	---------	----

※音楽・美術・理科・数学などの教科で参加したいとの声が多かった。

- ⑤ 学校へ復帰するためにタブレットは必要だと感じますか。

必要	4名	あまり変わらない	3名	必要ない	0名
----	----	----------	----	------	----

※タブレットでつながっている安心感が復帰を後押ししてくれている。

- ⑥ ⑤で回答した理由を教えてください。

必要	<ul style="list-style-type: none"> ・授業でも使うから ・ロイロノートでの課題の提出や、Teamsで予定などを知らせてくれたりするのがとても助かっているから ・タブレットがある方が少しは勉強しているから戻りやすいと思う
あまり変わらない	<ul style="list-style-type: none"> ・あまり使っていないから ・タブレットがあって良いことと、あまり良くないことが半々だから

(2) 原籍校担任の声

- ① Teamsであやばに学級（担任・児童生徒）との連絡を取り合うことに関してどう思いますか。

担任との連絡	良かった9名	どちらでもない0名	できなかった0名
児童生徒との連絡	良かった6名	どちらでもない1名	できなかった2名

- ② ①で選んだ回答に対して理由を教えてください。

担任との連絡	<ul style="list-style-type: none"> ・欠席の連絡や学校行事、予定などやり取りできるのは良かった。 ・素早くやりとりできたので情報交換しやすかった。 ・空いた時間に今日の様子などすぐ確認できるので助かった。 ・細かい日程調整が容易にできた。
児童生徒との連絡	<ul style="list-style-type: none"> ・会える機会が少ないため、タブレットを使って必要な連絡、課題の配布ができたのは良かった。 ・職場体験の確認がやりやすかった。 ・チャットやオンライン授業で連絡が取れた。 ・生徒とは一度も連絡できなかった。

- ③ あやばに学級の児童生徒とタブレットでやり取りして良かった点と、課題点を教えてください。（※評価に関してもあれば教えてください。）

良かった点	<ul style="list-style-type: none"> ・課題などタブレットを使って容易にやり取りできた。 ・職場体験の打ち合わせがしやすい。課題を渡しやすい。 ・細やかな連絡調整。すぐにできる。お知らせの配布に便利 ・登級できなくても自宅でやったものを写真で送ることができた。
課題点	<ul style="list-style-type: none"> ・使用頻度がまだ少ない、もっと利用価値を上げたい。 ・連絡を相手がしたいと思わないとコンタクトしにくい。 ・児童が猫背になっているような気がする。 ・マメにチェックしない生徒との意思疎通は難しいと思う。

④ 不登校の児童生徒が学校と繋がるためにタブレットは必要だと感じますか。

必要	8名	あまり変わらない	1名	必要ない	0名
----	----	----------	----	------	----

⑤ ④で選んだ回答に対して理由を教えてください。

必要	<ul style="list-style-type: none"> ・繋がるためのツールは多くて問題ないと思います。 ・ないよりあった方が連絡しやすい。 ・常に様子が把握できて自宅での学習の様子も分かるため。 ・授業の進み具合や他の生徒の活動の様子がよく分かる点。 ・生徒本人との連絡手段が必要。 ・直接連絡が取れる。また、適当な時間に連絡が取れる。
あまり変わらない	<ul style="list-style-type: none"> ・児童生徒が困っているときには助けになれるが、毎年のようにあやばにへ通う子にとってはあやばに学級に魅力を感じていると思うので積極的に活用できない。

IV 一年間を振り返って

1 成果

(1) 学級経営目標：心身共に安心できる居場所を提供する

- ① 学級経営を充実させ、児童生徒個々の課題に目を向けた対応、主体性を活かした活動や関わり方を工夫することで、子どもたちが安心して登級できるようになった。
- ② 子どもの活動がみえる掲示物や教室の環境づくりを工夫することで、自信と連帯感が育ち、安心して登級できるようになった。

(2) 学級経営目標：自立心と社会性を高め、集団への適応力を育てる

- ① 様々な体験活動や他者との関わりを多く持つことで、対人スキルを向上させる機会となった。
- ② 学校や保護者と連携して時間をかけながら働きかけをすることで職場体験や修学旅行等学校行事に参加できるようになった。
- ③ 保護者と連絡しやすいようにショートメールを活用したり、定期的な三者面談を通して、良好な関係を築き学校適応を進めることができた。
- ④ タブレット端末を積極的に活用することで、自主学習をスムーズに行うことができ、学校との繋がりを持つことができた。
- ⑤ タブレット端末を活用して学校の学習課題やテスト対策に取り組ませたことで、評価に結びつけることができ、児童生徒の意欲に繋がった。
- ⑥ タブレット端末で原籍校担任と直接連絡を取りやすくなったことで、情報共有やチャレンジ登校の調整など連携が短時間でとれるようになった。

2 改善点

- (1) 生活リズムが安定せず、登級しぶりの児童生徒への登級支援についての工夫
- (2) 専門的な立場から児童生徒の支援のアドバイスを受けられるよう SC の活用
- (3) 異学年・異学校児童生徒への対応を充実させるための支援員増員
- (4) 原籍校職員への定期的な来級の呼びかけの工夫

